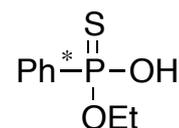


キラルなチオホスホン酸は、活性点と不斉点の位置関係など、他の不斉点をもつ酸とは決定的に異なる特性を有している。これらの特性から、より有効な非対称空間が不斉点の周りに生まれ、的確なキラル識別能の発現が期待できる。また、チオホスホン酸は従来のモッシャー試薬などのジアステレオマー誘導試薬に比べ、高い酸性度をもつ。その為、アミンとの相互作用が強くなり、より精度の高いNMRスペクトルが得られると考えられる。そこで本研究では、光学活性チオホスホン酸 **1** を合成し、それを種々のアミンに対して等モル量加え、その相互作用をNMRで観察した。その結果、アミノ基の α 位炭素に結合している水素、また β 位炭素に結合している水素のスペクトルが分裂した。その中でも、 β 位炭素に結合している水素に対する影響は、チオホスホン酸の構造的特徴に由来するものと考えられる。

種々のアミン(**2, 3, 4, 5**)に対し、光学活性チオホスホン酸をシフト試薬として利用することにより生じるケミカルシフトの変化と、ピークの分裂及びその積分比により決定された鏡像異性体過剰率を、HPLCにより得られたデータと比較し、考察した結果を報告する。



O-Ethyl-phenylphosphonothioic acid **1**

